

文学の中の酒

福西英三 著

大陸書房

文学の中の酒

福 西 英 三



大 陸 書 房

<著者略歴> ふくにし えいぞう

昭和5年、北海道旭川市に生る。

現在、サントリースクール専任講師

洋酒評論家

夕刊「フジ」の「さけ」「どりんく」

欄を担当

主要著書 「バーテンダー教本1〜4」

『ウイスキー百科』（以上柴田書店）

『カクテル小事典』（池田書店）

文学の中の酒

昭和五十二年一月三十日 初版印刷
昭和五十二年二月五日 初版発行

定価 一三〇〇円

著者 福西英三

発行者 竹下一郎

発行所 株式会社 大陸書房

東京都新宿区西大久保二一三〇五
（一六〇） 恵南ビル

電話代表（二〇九）三二八一番
振替口座 東京 一五五六二二番

印刷（株）殖産堂

カバー印刷（株）太陽印刷

製本（株）小泉製本

乱丁・落丁のものは小社またはお買求めの書店にてお取替え致します。

0098-003299-4424

文学の中の酒

目次

文学の中の酒

小説の主人公となったワイン……………9

ページをめくる愉しき

少年とシャトー・モートン

銘酒が燦くグリーンの世界……………21

ジンを待つ女

ハバナのダイキリ

男の友情

ロビンソンとぶどう酒……………37

イギリス人の発想法

完成しなかったビール

ジン・ライムに憧れた男……………50

デメララ・ラムの色

兵士の酒バーボン

ジンで自殺した女

☆『同じ一つのドア』

ジョン・アップダイク

☆『ハバナの男』

グレーム・グリーン

☆『ロビンソン漂流記』

ダニエル・デフォー

☆『年上の女』

ジョン・ブレイン

大都会に彷徨する少年の幻想……………65

雪のニューヨーク

天使のような妹

イギリス労働者の酒と女……………77

見事な泥酔の描写

完全な破滅というジン

シャンディを飲む娘

青春のハイデルベルク……………92

ぶどう園と大学生

バーデン・ワインの代表

上流階級のテネシー・ウイスキー……………105

ユダヤ人の酒嫌い

プールサイドの女子大生

シャンパンの別れ

☆『ライ麦畑でつかまえて』

J・D・サリンジャー

☆『土曜の夜と日曜の朝』
アラン・シリトー

☆『アルト・ハイデルベルク』

マイアー・フェルスター

☆『さようならコロンバス』
フィリップ・ロス

ホテルが舞台の人間模様……………120

ホテルマンの目

カクテル「錆びた釘」

世界最高級のブランドー

☆『ホテル』

アーサー・ヘイリー

オックスフォードの賢い友人……………133

美貌の青年貴族

ラムトリキュール

マテーニの恍惚と不安と

☆『ブライズヘッドふたたび』

イヴリン・ウォー

恋する女のグラス……………152

インテリ女性のお酒

アイリッシュ・ウイスキー

妊娠とジンジャー・ビア

☆『恋するオリヴィア』

ロザモンド・レーマン

ドイツ兵士が求めたもの……………169

カクテル・パーティー

☆『アダムよ、おまえはどこにいた』

兵士たちの心

非情な戦場シーン

ハインリッヒ・ベル

陶酔と破滅のアル中……………183

醒めた男の目

美しい幻覚症状

俺は地獄が好きだ

☆『活火山の下』
マルカム・ラウリー

第二次大戦前夜のパリで……………203

芸術家たちの会話

憧れのVAT 69

アメリカ女の酔っ払い

ベルノー酒の香り

☆『招かれた女』
シモーヌ・ド・ボーヴォ
ワール

ノーベル賞作家の嗜好……………216

ウイスキーの中の人生

伯爵のネグローニ

女心のマテーニ

☆『河を渡って木立の中
へ』
アーネスト・ヘミングウ
エイ

ヘミングウェイの美学

スパイは美食家……………234

貴重な酒の資料

ポルト・ワインの声

ドイツの高級ワイン

老判事とバーボン・ウイスキー……………258

アメリカ南部人

プルーフと度数

健康と酒への嫉妬

☆『黒い部屋』
コリン・ウイルソン

☆『針のない時計』
カースン・マッカラーズ

装丁・中島 靖侃

小説の主人公となったワイン

『同じ一つのドア』

ジョン・アップダイク

ページをめくる愉しさ

私の趣味といえば、はなはだ常識的な線ながら、読書である。だいたい、私の知識は、実生活のうえで得たものよりは、読書によって得たもののほうが、圧倒的に多い。誰しも、そうなのであろうか。

私は、朝刊を読むとき、記事のほうに半分、広告のほうに半分ぐらいの比重を掛ける。ただし、広告といっても、主として図書の広告に限られるから、一ページめから五、六ページめ止まり。これを丹念に眺める。そして、目ぼしい本の広告を記憶に入れ、または切り抜いて定期券入れに入れ、勤め先近くの書店で実物に当たって見る。内容が、仕事に必要な本であるか、自分の

興味を満たしてくれそうな本であることがわかれば、たいていその場で購入してしまう。

なにしろ、日本は、日々発刊される図書の点数が、世界の文明国にも例を見ないほど多い国である。書店の書棚のスペースには限りがあるから、新刊書の入替えのサイクルが早い。なるべく早く買っておかないと、あとで探すのが大変だったり、注文して取り寄せてもらおうという手続きを踏まなければならない。だから、私は、新刊書は発売後なるべく早い機会に購入することになっている。

そして、広告がその発刊を知らせてくれた本を買ったら、すぐ書店を出るかというと、そうでもない。次に、通勤電車（これに乗っている時間が、片道優に一時半はかかる）の中で暇つぶしのために読む文庫本か新書本を物色する。手にとって、前からか、後ろからか、とにかくパラパラとページをめくってみる。そのとき、例えば、

「カンパリを飲んでる男というのは、何となく安っぽく見えるなあ」

と、滝が私のほうを眺めて言った。「どうも、その単純な赤い色がいけないね」

「昼間からコニャックをやっている男は、どことなく信用できない感じがあるんじゃないですか」

「そんなことはないさ」

「あなたは別ですよ」

などという文章がふっと目についたりすると、酒に関係のある仕事で明け暮れしている私は、即座にその本を買ってしまふ。右の引用文は講談社文庫の五木寛之『ソフィアの秋』の中の短篇、『ローマ午前零時』の中の一節だが、私はこの部分を、そういう風にして書店の店頭で見つけたのだった。

蛇足とは思ふが、説明をつけ加えるならば、カンパリ(Campari)というのは、イタリアのミラノでつくられている苦味と甘味をあわせ持ったリキュール。コニャック(Cognac)は、フランスのコニャック地方でつくられるブランデーだ。

私が、本をパラパラと解きほぐすとき、こういう酒に関係のある文章は、すぐ目につくのである。いや、目につくという感じよりは、むしろ、ページの中からふっとそこだけが浮き上がってきて、こちらの目に飛び込んでくるという感じなのだ。書店の店頭で品定めしているわけだから、一ページ一ページ文章を調べている状態ではない。にもかかわらず、こういった文章が、まるで海から立ち上がったアフロディテのように、私の目に存在を訴えかけてくるのである。

思うに、私の頭の中は、職業上、朝から夜中まで、酒、酒、酒……と、酒の情報の出し入れで瞬時も休まる暇はないのが現状だから、脳波のほうも「酒」というサイクルに常にセットされた

ままの状態にある。そのため、外部に存在する酒情報に対して、脳波のほうが、他人よりも鋭敏に働きかけているのだろう。だから、私の視線が、酒情報のありかに近づく、と、脳波のほうが、両眼を窓として情報キャッチに始動するのだろう。

例えば、新潮文庫でジョン・アップダイクの『同じ一つのドア』を購入したときも、同じような状態を経験して、衝動買いしたのであった。

平積みになって、『同じ一つのドア』が並んでいる。「ジョン・アップダイクか……。一九三〇年代生まれのアメリカの作家だったな……」。私と同じ年代に属するから、そのことはよく認識していた。一冊ぐらい読んでみようかな。そう思って手にとり、パラパラと開くと、

「こういうやつはどうだい？」クレイトンは前に置いてあるグラスに触れた。グラスには大學生用の酒であるビールがはいっていた。

まだビールを飲むなんて、クレイトンはなかなかかわいいことをやるんだな！ 錯覚のせいで、ビールが黒っぽいバーの上に浮かんでいるように見えた。

「黄色いばらを黄色にしたのは誰？」

といった文章が、フワッと左側のページから浮き上がって、私の目に飛び込んできたのだ。

「黒っぽいバーの上に」「浮かんでいる」か、なかなか味のある描写だな、と私はふと感心する。また何ページか、めくってみる。

リチャードはマントルピースから八ドルのティオ・ペペの瓶をとった。……氣どったボーズで三つのグラスに……店の専門家に言われたとおりシェリ酒をくるくるまわしてエステルとエーテルとを分離させていると……

『グリニッジ・ヴィレッジに雪が降る』

そういった文章も、目の窓から脳に侵入してくる。ジョン・アップダイクは、小説の中にけっこう酒を登場させているじゃないか。これは、ひとつ、買って読んでみなくては――。

そう思いながら、最後に何気なく念を押す調子で初めのほうのページを繰ったら、いきなり、

ちらっとラベルを見た。▲シャトー・モウトン・ロスチャイルド。一九三七年▼と書いてあった。

『フィラデルフィアの友だち』

という文字が目突きささってきた。しかもその小説は、これで幕切れになっている。この短

篇では、このシャトー・ワインが、構成上きわめて重要な役割りを担わせられているに相違ない

ことは、この文章の終わりがたで推測がつく。

これは、是非とも買って、しかも早速、読んでみなくては――。

私は、一冊を求め、帰宅する通勤電車の中で、『フィラデルフィアの友だち』から読み始める。

少年とシャトー・モートン

この短篇の主人公は、貧しい家庭に育ったジョンという少年だ。ある日、このジョンの家に、フィラデルフィアから客がくる。ジョンの父は学校の教師をしていて、この日はまだ学校から帰ってきていない。ジョンの母は、客にワインでも出したいのだが、掃除が忙しいので、そのワインを息子のジョンに買いに行かせる。父親が帰ってから、酒屋に買いに行けばよいようなものだが、それを待っていたのでは、酒屋が閉まってしまう怖れがあるのだ。

それで、ジョンは母親から二ドルを渡され、カリフォルニア・シェリーか何か、とにかく安くいいものを買っておいでといいつかつて、酒屋に赴く。ところが、酒屋は、ジョンが十六歳という若さなので、証明書がなければ酒を売れない、と素気なく断る。